



巻 頭 言

農薬と農産物の安全性

(財)日本植物調節剤研究協会 理事 浜 宏幸
全 農 常務理事

手前味噌で恐縮だが、私が気に入っている全農の最近のキャッチフレーズに、「新鮮・美味・安心あたりまえを届けます」というのがある。これは農産物は、安心なのがあたりまえであって、安全性で農産物を差別化するのはおかしいと、ごく当然のことを言っているだけのことである。自動車産業でも航空機産業でも安全性で競争などしないであろう。安全は、基本的にあたりまえでなければならない。

飽食の時代になって、スーパーの店頭などに食料があふれるようになると、何でも差別の対象になるのかも知れないが農薬の使用問題をそのためにもちだすのは、健全な傾向とはいえない。

農家が、農薬を使用するのに何となく後めたい気持ちになったり、消費者が安全な農産物とそうでない農産物があるのではないかとイメージすることほど不幸なことではない。

こういった風潮を一掃するためには、まず農家が農薬を正しく使用し、その防除実態を消費者が是認し理解することが肝要となろう。

農産物への安全のベースとすべき基準は、もちろん安全使用基準である。各種のフォーラムなどで、時々この基準を疑問視する発言を耳にするが、これを疑うようであれば、農薬などは最初から存在し得ないのである。安全使用基準は車社会における交通ルールのようなものであって、農家が安全使用基準を守り、消費者がその意義を理解するようになれば、安心はあたりまえとなり、農薬問題は話題にもならなくなるかも知れない。

ところで農薬に対する漠然たる不安は、一体どこからくるのであろうか。一つは、分析機器と分析技術の発達にあるのかも知れない。10数

年前であれば、ND（検出せず）で存在せずという解釈であったものが、ppt といった超微量のオーダーで検出され、存在するという解釈にかわってきた。NDであれ、pptであれ残留基準値に対する理解が徹底していれば、問題はない筈であるが、存在することを否とする人がいると問題となってくる。これは、化学物質には安全か否かの閾値^{しきいち}が必ず存在するということが理解されないことによる誤解だと思われる。pptのオーダーともなれば、天然に存在する有害物質なども検出されるであろうから、そういった物質までもけしからんといっているのと同じことになるではなかろうか。

また、観点を変えてみると、農薬のベネフィットは農家は、肌でわかるが、消費者にはわかりにくいものである。マスコミに農薬が報道されるときは悪い報道（リスク）ばかりである。それも余り正確な報道と云い難いものもある。むしろ、一種の風評害的な報道すら見受けられる。そして消費者の頭の中にどんどん農薬の悪いイメージができあがってしまう。

農薬は、肥料とともに農産物生産にとって欠かせない資材であるから、農薬のリスクーベネフィットについて公正に、生産者は生産者の立場から、工業会は工業会の立場から、行政は行政の立場から見つめ直して、消費者の目線を合わせるように努力する必要がある。

消費者の対象としてはなかならず、台所を問わず、子供を育てている家庭の主婦がそのターゲットになろう。

最近では、主婦自身の勉強会も活発であり、そういった機会に、それぞれの立場からあるいは相互連携して説明していくことも必要であろう。